

Gerard Kuijpers

80年代初期より、主にスチールと石を使った作品を手掛ける独学のデザイナー兼アーティストのGerard Kuijpers (ジェラルド・クイパーズ)。彼にとって、明確な機能を持たせることが最終的な創作の意図ではない。大理石とスチール、木材とガラスといった組み合わせから緊張感とバランスを探りつつ相互作用を図り、それぞれの個性が強調される瞬間を捉えている (撮影/ Amber Vanbossel)



Studio Elémentaires

「不思議な国のアリス」にインスパイアされたペンダントライト「Tea Party」のプレゼンテーション。天井から吊られた円盤の下面に、七つのディスクが配置され、各々の中心からずらした位置に照明が取り付けられている。ディスクが回転することで、視線を別の点へ滑るように導き、軽快なメリーゴーランドに揺られる喜びを想起させる。デザインは、フランス人アーティスト Apolline Couverchel (アポリンヌ・クヴェルシェル) と Gauthier Haziza (ゴティエ・アジザ) が率いる Studio Elémentaires (撮影/ Stanislas Huaux / Jeremy Marchant)



Interni

ミラノ大学を会場に、毎年数々のインスタレーションを展示するイタリアのデザイン誌Interniの企画展。創業70周年の今年は、「Cross Vision」を主題に、横断的思考を物理的に表現した作品を紹介した。ベルリンを拠点に、ランドスケープや建築の分野で活動するデザインスタジオTopotek1は、欧州の伝統的なベンチと古代ペルシアの風の塔を組み合わせた、公共空間向けの「Climate Adaptive Bench」をデザインした。冬は、太陽熱を吸収して色の濃い座面を温かくし、夏は、塔の上部に設置された吸入機が暑い空気を冷却して、下部の穴からそよ風を送る仕掛けが考えられた (撮影/ ナカサ&パートナーズ)

Elle Décor

「Material Home」は、素材が主役となるインテリアデザイン・プロジェクトと生活空間の進化への関心から Elle Decor Italia が企画した没入型の展示で、バラツォ・ボヴァラで開催された。インテリアと展示空間を手掛ける Elisa Ossino Studio と照明デザイナーの Rossi Bianchi (ロッシ・ビアンキ)、ランドスケープデザイナー Studio Antonio Perazzi (アントニオ・ペラッツィ) が監修を手掛けた。



上/七つの空間は、錬金術、パウダー、表面、反射、ソフト、オーガニック、色合いとそれぞれ特定の素材や機能にちなんで名付けられた。「ソフト」を演出した寝室では、壁面に Slalom社のテクセル原毛100%の吸音壁「Raw1」を使用。ヘッドボードのタイルは、丸みを帯びたエッジが特徴の41ZERO42社の「Biscuit」、床は、オーク材の寄木細工のフローリングを正方形に敷き詰め、床と壁がシームレスに連続する効果が生み出された。円形の出入り口が、ベッドルームとバスルームを結び、下/スチール製のモノリスカウンターが設置されたキッチン空間では、「表面」を演出。壁面では、De Castelli社のメタル被覆材 Vela を研磨加工し、カーテンのように柔らかく仕上げている (撮影/ 浦田薫)

Objects with narratives

Objects with Narrativesは、物語性のある作品を展示するベルギーのコンテンポラリーギャラリー。今回、ロッテルダムで活動するオーストリア出身のデザイナー Laurids Gallée (ロリ・ガレ) による、ポリマー樹脂を用いた照明器具、ローテーブル、ベンチ、コンソールなど七つのピースで構成される「Hazy Gymnastics」コレクションを紹介した。さまざまな製造技術を学んだガレは、現代的な融合を生み出すために、常に高度な製造プロセスを考慮しながら、伝統的および民族伝承の要素を探求して現代的な物質性を作品に採り入れている (撮影/ Amber Vanbossel)



Artemest

オンラインを通じてイタリアの職人技とデザインを展開する Artemest は、フォーリサローネ 2 回目の参加となる今回、20 世紀初期に建立されたミラノの邸宅レジデンツァ・ヴィンヤレで「L'Appartamento」展を開催した。複数のキュレーターにより厳選された170点の家具やインテリアアクセサリにより、玄関、カクテル、ダイニング、リビング、ベッドルーム、そして中庭にそれぞれ世界観が演出された。写真は、モダニズムとバロック様式を対話させた VSHD Design がキュレーションしたダイニングルーム (撮影/ Tomaso Lisca and Luca Argenton)